

審査の結果の要旨

氏名 李 舜志

本論文は、フランスの哲学者、ベルナル・スティグレル(Bernard Stiegler)の技術哲学に着目し、理念の専制による自由の抑圧や、理念の喪失によるシニシズムを回避しつつ、教育における理念の再構築をめざすための基礎的な議論を行っている。

スティグレルは、1952年に生まれ、高名な哲学者ジャック・デリダに師事し、三巻本の大著『技術と時間』の著者として広く知られている。しかしながら、フランスにおいても、むしろ日本においても、教育学の世界では、スティグレルの哲学を踏まえた教育思想の展開は、まだその端緒についたばかりである。

本論文の第1章は、スティグレルが、「理念はいかに構築されるのか」という問いを提起しつつ、理念を語らずに行われる傾向にある現代の教育に対し、危機意識を抱いていることを示している。スティグレルは、現代のような「理念なき社会」においては、自然を改変するいわゆる科学技術の展開・増大をとどめることはできないため、従来行われていた教育理念にもとづく教育実践は困難になっている、と主張する。

第2章は、人間と技術の関係を、神話・人類学・存在論の三つの視座から、検討している。これら三つの視座から、スティグレルは、外在化による内在化という概念を提示し、この概念をもって人間と技術の根本的な関係と見なしている。この外在化による内在化は、内在する思念・理念が具体的・物質的に作られ外に現れるという通念を越えて、実際の制作・遂行(プラクシス)のなかで・その後に思念・理念が象られるという考え方である。

第3章、第4章は、以上の外在化による内在化という考え方をより精緻に分析することによって、技術と理念の関係を検討している。そこでは、理念は、新たに発明された世界全体の見方であり、技術は、その理念を具体的・実効的に支えるものである。この営みが「代補」と呼ばれる。それと同時に、口述、暗唱から教科書や黒板の発明といった、教育界においてよく知られた技術の歴史的変容もまた分析され、代補の歴史性が示される。

第5章は、代補の歴史性を敷衍するために、フッサールの議論を参照しつつ、アルファベットという文字(すなわち、スティグレルのいう意味の「技術」)が古代ギリシアの「公衆」また「ポリス」を可能にしていると論じている。この文字による人びとの連帯・相関は、技術が理念の専制を抑止する批判的契機を構成することを示している。

第6章は、以上の議論にもとづき、カントの『啓蒙とは何か』を取りあげ、技術を介し理念を構築しかつ反省的にそれを批判することが、カントの「成人性」ないし「市民性」の本態であると論じている。重要なことは、この成人性が所与の実体的概念ではなく、批判によって無窮に再構成されつづける動態的概念であることである。

以上の議論を通じて、本論文は、教育学において教育の理念を語るうえで必要とされる基礎論を提示している。それは、所与の規範としての理念をただ前提にするのではなく、無窮の構築及び批判を繰り返しつつ、思考がより適切な理念に向かうことであり、その契機が技術であること、すなわち外在化による内在化という思考の機制であるということである。スティグレルの技術概念、立ち位置は、プラグマティズムやハイデガーの技術論との対比においてより鮮明になると思われるが、それは今後の課題として残されている。しかし、それはこの論文の価値をいささかも減じるものではない。よって、本論文は博士(教育学)の学位を授与するにふさわしい水準にあるものと判断された。